

災害への備えはインターローカルなつながりから

矢守克也（京都大学防災研究所）

2011年8月、筆者が阪神・淡路大震災の被災者と結成した語り部の団体（「語り部 KOBE1995」）や、防災について学ぶ神戸の大学生が中心となって、東日本大震災の被災地の一つ岩手県野田村の小学生たちを、夏休みのひとときを過ごしてもらうため、神戸に招待した。

それから数ヶ月後の2011年12月、今度は、神戸のメンバーが野田村を訪問した。大学生と子どもたちはドッジボールやバーベキューで、大人たちはカラオケ大宴会で、大いに盛り上がった。語り部メンバーは、小学校で、「阪神のとき子どもたち」をテーマにした特別授業も行った。

17年前、語り部のメンバーはみんな、被災直後の苦しみのなかにあった。そして、その思いは、もちろん今も完全に消えることはない。だからこそ、野田村の人たちに、自分たちの被災とその後の17年について話しにいろいろと意気込んだ。

17年前、大学生たちは全員、小学校に入る以前の子どもだった。だから、震災については、うっすらとした記憶とその後の教育を通じて知っているだけである。しかし、だからこそ、大災害後を生きることになる野田の子どもたちを勇気づけようと思ってくれた。大学生たちは、夏休み神戸で撮影した写真を一人一人別々にまとめた「世界に一つしかないアルバム」をお土産として持参した。野田の子どもたちは、それをずっと大切にしてくれるだろう。

そして、今年1月17日、5時46分を、私は、神戸市中央区の東遊園地で迎えた。そこには、夏休みに子どもたちを引率してきくれた野田村教育委員会の小野寺勝さんはじめ、野田村の方々数名がいらっしやっした。筆者もメンバーの一人である日本災害救援ボランティアネットワークが、1.17を直接感じてもらおうと招待したのだった。

さらに、今年2月、今度は、小野寺さんを高知県四万十町興津地区と神戸市須磨区にお招きし、3.11の体験についてお話をいただいた。興津地区は、筆者がずっと、住民の方々とともに津波防災にとり組んでいる集落である。最近公表された国の想定では、南海地震が発生すると25メートルもの津波が押し寄せてくると予想されている。そんな地域だからこそ、東北の体験を直接聞いていただきたいとかねがね考えていた。今回それがようやく実現した。

他方、須磨区には、語り部メンバーの一人が自治会の役員を務めている地区がある。この地区は、阪神・淡路大震災のときに大きな被害を受けた地区だが、最近では、住民の入れ替わりも激しく、「防災に対する意識が低下気味」（メンバーの言葉）であった。ここでも、小野寺さんを囲みでの集会を企画していただいた。住民のみなさんには、防災の重要性を再認識していただけたと思う。また、同地区に、野田村出身の方がお一人お住まいで、集会に駆けつけてくださったこともうれしかった。

近頃、地震や風水害など、災害が多発している。できるだけ少なくなって欲しいと願うとともに、そのきびしい現実をわずかでもよい方向に反転させることも考えねばならないと思う。災害が多いということは、災害の体験が生々しい方々がたくさんおられるということである。その体験が風化してしまう前に、地域から地域へ、世代から世代へ、人から人へつないでいくことが大切である。筆者が、今、阪神・淡路から東北へ、東北から阪神・地域へ、そして四国へと地域を橋渡しし、同時に、過去・現在・未来と時間をつなぐ試みを展開しているのは、そのような思いからである。

2012年3月11日、筆者は、十数回目の野田村訪問を果たした。小野寺さんはじめ、昨年の夏以来交流を重ねてきた方々と何回目かの再開を果たした。あの日から1年。慰霊式典の会場の外は、冷たい雪であった。